チーム虹橋の取組

前上海日本人学校虹橋校　教諭
静岡県下田市立白浜小学校　教諭　鈴　木　浩　司

キーワード：大規模校、上海日本人学校虹橋校、特別活動、通学安全、協働、チーム虹橋

１．上海日本人学校虹橋校ついて

私の赴任した平成25年度から平成27年度までの上海日本人学校虹橋校の全校児童数、学級数、職員数は、以下のようになる。

平成25年度　全校児童数1538名　50学級　職員数113名
平成26年度　全校児童数1412名　47学級　職員数111名
平成27年度　全校児童数1301名　47学級　職員数114名

上海日本人学校は、社会情勢に伴って、児童数が年々減少しているとはいうものの、依然として大規模校である。100人を超えるスタッフの中には、文科省からの派遣教員だけでなく、海外子女教育財団から派遣される優秀な人材や現地採用職員、そして、外国人スタッフも含まれている。様々な立場で、様々な地域から集まったスタッフが力を合わせて１つの学校を運営しているのである。子どもたちも同様である。全国各地から集まった子どもたちが一つ屋根の下で学びを共有し、生活を共にするのである。必然的に求心力が求められる。

上海日本人学校虹橋校の名の下、上海に住む子ども達の教育に一丸となって取り組んでいる職員集団の誇りや所属感、一体感は非常に高いものであった。少なくとも私の赴任した期間、教職員だけでなく、子ども達もSJS（Shanghai Japanese School）のロゴを背負い、虹橋（Hongqiao（ホンチャオ））に愛着をもつ子ども達は多くいた。大規模校である上海日本人学校虹橋校の職員と児童が一体となって進めた活動の一端を紹介したい。

２．特別活動の取組

(1) テーマの設定

虹橋校の特徴の１つに活発な特別活動がある。虹橋校では、１年間を通した特別活動におけるテーマを設定する。それが教師も児童も合言葉のようなものとなり、年間の様々な活動を方向付けたり、盛り上げたりした。私の赴任していた３年間は、以下のテーマで取り組んだ。

平成25年度「和」、平成26年度「更喜欢」、平成27年度「ハッPスマイル」

テーマの言葉とともにポーズも決める。朝のあいさつ運動のときや全校集会、昼の放送など、ことあるごとにテーマの言葉と決めポーズを行った。何度も繰り返し行うことで、虹橋校全校に定着していった。

およそ1400人の児童と多くの職員が、この合言葉を大きな声で発する。そして、全員が声をそろえてポーズを決めることで互いにつながりを感じ、一体感を得ることができた。

平成26年度の「更喜欢」は、中国語読みで「グンシーファン」と読み、下のような願いが込められていた。

> 虹橋校の子どもたちは、保護者の事情等で、期間限定で上海で生活している。近い将来、日本に帰る子がほとんどだろう。そのような子どもたちに、学校のことをもっと好きになってもらい、「虹橋校にいてよかった」「上海にいてよかった」という気持ちをもたせることが、日本人学校の職員の役割の一つのように思う。また、日本の報道等で、中国の悪い印象をもってしまう傾向にある今の現状の中、どのような理由でも、今住んでいる「中国・上海」に興味をもち、好きになれる子を育てることは、とても大切なことだと思う。身近なことに興味をもち、好きになれる子は、視野を広げて、他のことにも興味をもち、好きになっていけるはず。それが本当の国際教育だと考える。　（平成26年度　特別活動実施計画より）

(2) キャラクター作り

子ども達からキャラクターのデザインを募集した。たくさんの応募の中から児童会としての役割を担う中央委員会が絞り込み、全校児童の投票でキャラクターを決定した。自分たちで決めたキャラクターだからこそ、児童の人気は絶大である。右写真は、昼休みに行ったキャラクターの握手会の様子である。多くの児童がキャラクターとの握手を求めて体育館に集まった。

シンタイガーの握手会

平成26年度は、「心」も「体」も育てようという意味と虎の「タイガー」とを合わせて「心体ガー（シンタイガー）」という名のキャラクターが作られた。もちろんこの名前も児童からのものである。

キャラクターは、行事や集会など、時には子どもが、時には教員がその役割を担い、子ども達を楽しませ、あるいは優しくメッセージを伝えるスポークスマンとして大活躍した。

(3) 運動会などの行事との連携

特別活動のテーマやキャラクターは様々な教育活動と連携しながら学校全体に浸透していった。児童会行事はもとより、運動会などの学校行事と連携させて活動が行われた。例えば、運動会スローガンやペットボトル壁画を作成したり、運動会当日にキャラクターを登場させて行事を盛り上げたりした。平成25年度は、運動会の各種目のどこかに「和」の文字やかけ声、あるいはポーズを入れるという工夫を加えることで、テーマを意識付けた。

合言葉となるテーマや決めポーズ、そして、キャラクターは、同じ時を虹橋校で共に過ごした児童とスタッフにとって、思い入れの深いものである。虹橋校には「独歩博愛」という立派な校訓がある。高名な陳舜臣の作詞した校歌もある。「自ら学び、明るく、やさしく、たくましく、国際性豊かな児童を育成する」という学校目標もある。それらの方針を見据えながらも方向性を見失わず、さらにかみ砕いて、子ども達にとっても職員にとっても身近なものとして、あるいは、声を合わせやすいものとして設定した特別活動のテーマやポーズ、キャラクターは、虹橋校を一つにする大きな役割を担っていた。

３．緊急事態への対応

上海日本人学校虹橋校の登下校は、基本的に保護者の責任のもとに行われている。日本国内と違って特に安全面に気を付けなければならない海外である。子ども達が事故や事件に巻き込まれたら大変なことである。虹橋校では、通学安全部（以下「通安」）が設置され、通学安全主任を中心に、登下校関係を担っている。重要な役割である。通安は、PTA 通学安全担当や事務職員と協力しながら、児童のスムーズで安全な登下校を推進している。平成26年度まで、虹橋校では、バス通学、個人通学、ビラ通学と分かれていた。個人通学は、保護者により徒歩や自家用車で送り迎えされる登下校方法である。ビラ通学は、学校に隣接する「虹橋ビラ」という戸建ての集合住宅型公寓（マンション）からの通学である。学校と虹橋ビラの門衛が立ち会う中、決められた時間だけ門扉が開き、そこを通って登下校を行う。そして、バス通は、公寓や不動産屋のバスなど、保護者が契約したバスを使って登下校する方法である。児童の多くは、バス通学であり、数にすると60台を超えるバスが毎朝夕に学校に出入りしていた。子ども達の通学の足となる大切なバスである。

ところが、平成26年１月、通学に使っていたバスが上海当局により通学用バスとしての使用禁止となった。以下、日本経済新聞のインターネット上の記事の一部である。

上海の日本人学校、通学バス禁止で困惑　当局が突然の通告

【上海＝菅原透】中国・上海に２校ある日本人学校で27日から通学バスの使用が禁止された。これまでは同じマンションに住む保護者同士でお金を出し合うなどしてバスを手配してきたが、地元当局が「規定に合致していない」として突然、通告してきた。現地駐在員は「タクシー代など新たな費用負担は重い」と困惑している。

通達は23日に出された。日本人学校は26日は臨時休校して保護者説明会を開いたため、27日がバスを使わない初日となった。約1400人の小学生が通う上海日本人学校虹橋校では現地駐在員の社用車やタクシーで通学する生徒の姿が目立った。引率した保護者の一人は「これから毎日、タクシーで送り迎えしなければならない」と話した。　（日本経済新聞　2015/１/27付）

緊急事態であった。およそ1400人という児童数をかかえる学校である。それぞれの家庭がタクシーや保護者の社用車での登校となれば大渋滞が予想される。学校の前の道路はそう広くない。加えて中国の交通事情は日本と比べて決して良いと言えない。タクシー運転手も様々であり、何らかの手立てを講じなければ1000人を超える児童の下車を整然と行うのは、不可能に近い。

バスが禁止されてからというもの、通安を中心に朝早くから夜遅くまで、子ども達の登下校対策に追われた。職員は朝早くから、タクシーや社用車の交通整理を行った。下校時もバスがないため、一人ひとり保護者への引き渡し下校を行った。児童数が多いため、保護者への引き渡しがスムーズに行えるように綿密な計画と手順を練る必要があった。子ども達を下校させた後、夜遅くまで本日の登下校がどうだったのか、明日に向けてどう改善させていったら良いのか全職員が集まって話し合った。そして、翌日も朝早くから登校の交通整理を行うといった日々が続いた。

特に大変だったのは、通安である。その通安の大変さを皆で感じ、応援した。朝の交通整理を職員は自主的に行った。虹橋校に子ども達を安全に登校させ、無事に保護者に引き渡すために、職員一丸となって動いた。下校時の児童引き渡しは教室で行われたが、混雑を避けるため廊下は土足となった。上海当局により「校車」として認可されたバスが手配できるまで、不安定な登下校が続いた。子ども達も保護者も大変であった。皆の大変さを感じて、職員も動いた。

校車での下校の様子

平成27年度のスタートともに、認可の下りた校車が開始された。新しいシステムである。すぐにうまくいくものではない。実施しながら、修正、改善していった。

職員一丸となって動いたといっても、全てが一枚岩で行動したというわけでない。夜遅くまでの話し合いでも、皆同じ意見ですぐに解決した、ということではない。それぞれの意見が飛び交い、１つの行動に賛否両論あった。意見がまとまらないからこそ、時間も費やした。一丸となるとは同じ意見でまとまるということでなく、職員全員が、虹橋校の登下校を、子ども達の登下校を何とかしようと本気になっていたということである。皆が他人ごとでなく、揺れた虹橋校を支えようと一生懸命だった。

海外という地では、何が起きるか分からない。平成27年７月、100世帯以上の日本人が居住していた「虹橋ビラ」が閉鎖となった。突然のことである。学校と虹橋ビラを通じる門扉はコンクリートで閉じられた。学校に隣接していた虹橋ビラは、日本人学校の有事の際の食糧運搬通路としても考えられていた。それが突然の閉鎖であ

る。日本人学校は、海外に存在し不安定なものである。それだけに、そこにいる職員は学校の運営に主体的に関わる意識が大切になる。

通学バスの突然の禁止にしても、虹橋ビラの閉鎖にしても、そのときの緊急事態の対応に職員も子ども達も保護者も、大変な思いをしながら取り組んできた。この緊急事態への対応は、意図的な教育活動でないが、皆が一丸となって乗り越えてきた大きな事態であった。

４．虹橋校スタッフの協働

平成26年度に虹橋校の研究主任を任された。そのとき、私は「着目児」を設定し、その子の表れをつぶさにみていくことで、その子の学びを明らかにしていこうとする研究方法を提案した。その研究方法によって児童理解を深めることの大切さや目の前の子どもから授業改善をしていくことをねらった。各学年の中心授業は、着目児を設定して行うこととした。事後研修会は着目児の表れから始まり、その子の学びを明らかにしていく過程をたどった。その子を通して、授業全体を明らかにしていくことを提案した。

大規模校である。1つの教室に何十人という教員が参観する。着目児となる子どもは多くの参観の目を受けることとなる。まして、着目児の表れから事後の話し合いがスタートするため、授業でのその子の様子をみていないと話し合いが成り立たない。しかし、教員が多すぎて観察することすら難しい状況であった。

すると、ある学年は、着目児の座席の配置を変えようと考えた。着目児を複数人数設定しようと考えた。また、ある学年は、ビデオなどのICT機器を活用して、空き教室で実況中継放送をしようと考えた。そして、そこで着目児を観察できるようにしようと工夫した。ある学年は、実況中継に加えて、教師の姿も記録しようと考えた。どの学年も物理的な困難さを解消しようと前向きに工夫を加え始めた。私は、それらの前向きな姿勢や提案に対する協力的な姿に頭の下がる思いをもつと同時に感動した。上海日本人学校虹橋校には、協働する前向きなスタッフがたくさんいた。

上海日本人学校は、1975年（昭和50年）に和平飯店の一室を借りて上海補習校として開設し、1987年（昭和62年）に日本人学校として開校された。歴史は古く、その学校文化や学校経営システムはこれまでの試行錯誤の中から積み上げられてきたものであったり、その時々のニーズによって改変されてきたものであったりするのであろう。これまで積み上げられてきた学校文化が、虹橋校の特別活動のような活発な取組であったり、中国語などを組み入れた独特な教育課程であったり、あるいは海外の地であるという特別性からくる共同体意識であったりすると思うが、その根底には、熱意をもって取り組むスタッフの協働する姿勢があるからこそ、チーム虹橋として一体感をもって教育活動を進められるのだと思う。特活の実践にしても、緊急事態への対応にしても、前向きで熱意のある職員が力を合わせてその対応に取り組んできた。子ども達のために、虹橋校のために、一生懸命に頑張る同僚のためにと熱意をもって取り組むスタッフがチーム虹橋の何よりの原動力であり、この先も大切にしていきたい宝であると確信している。

最後に、今も虹橋校を支えるスタッフにエールを送るとともに、このレポート作成のために資料を提供してくれた平成26年度虹橋校特別活動主任であり現在滋賀県高島市立安曇小学校に勤務する青木明弘教諭に感謝の意を表して、チーム虹橋の報告のまとめとする。